

中国銅鑼の謎

チャイニーズ
ブロンズ

The Case of the Chinese Gong
1935
by Christopher Bush

主要登場人物

| | | |
|--------------------|----|-------------------|
| ルドヴィック・トラヴァース | …… | 著述家。私立探偵 |
| ヒューバート・グリーヴ | …… | ペイリングス荘の主人 |
| マーティン・グリーヴ | …… | ヒューバートの甥、元玩具工場経営者 |
| ブレンダ・グリーヴ | …… | マーティンの妻 |
| ロムニー・グリーヴ | …… | マーティンの弟、画家 |
| ヒュー・バイパス | …… | ヒューバートの甥、教師 |
| トム・バイパス | …… | ヒューの弟、退役軍人 |
| チャールズ・マントリン | …… | ヒューバートの弁護士 |
| ジョン・サービス | …… | ペイリングス荘の執事 |
| アリス・サービス | …… | ジョンの妻、ペイリングス荘の家政婦 |
| メージャー・テンペスト | …… | シーバラ警察署長 |
| キャリア | …… | シーバラ警察署の警部 |
| ポールゲート | …… | シーバラ警察署の巡査部長 |
| シニフォード | …… | 監察医 |
| パーマー | …… | トラヴァースの召使 |
| ジャクソン・ベンドライン | …… | イーストボーン在住の弁護士 |
| バスター・カー | …… | コメディアン |
| カーリー・ドリュウ（ミステリオーン） | …… | 手品師 |

レイへ

彼こそが、現実の舞台で、
ヒューバート・グリーヴ殺害の手段を実演してくれた人物である

第一章 間違った男

トム・バイパスは、ブレンダ・グリーヴに会って、夫のマーティンが家にいるか確かめようと、ボンド・ストリートの店に立ち寄った。世界恐慌の早い段階で、グリーヴ夫妻は玩具工場の経営に失敗して財産を失い、家や車を売り、メイドを解雇し、マーティンがなんらかの仕事を見つけるまで質素なフラットに移り住み、自分たちだけでどうにかやりくりしていた。一年後、グリーヴ夫妻の状況は絶望的となり、マーティン自身も極限状態まで追い詰められていた。親類の施しを受けながら、日中は求人広告の応募に向き、夜は郵便で求職に応募する日々を過ごしていた。

それから、グリーヴ夫妻は、カムデン・タウンにある、すさんだ三階建てのフラットに落ち着いた。ありがたいことに、マーティンの弟、ロムニーが、彼らのために友人からそのフラットを買い取り、トム・バイパスが何かと金の工面をしてくれた。その後、ブレンダはボンド・ストリートの写真店での仕事を見つけた。それは、彼女の母親の友人が経営する店だった。マーティンは、一軒一軒仕事がないか店を訪ね歩いたが、トムの命令により、一カ月で断念した。さもないければ、彼は命を落としていただろう。

店で待っているのが誰かわかると、ブレンダの顔が明るく輝いた。

「やあ、ブレンダ」トムが声をかけた。「ちよっとマーティンの様子を見にいかうと思っっているんだ。

それで、先にここに立ち寄って、情報を得ておこうかと」

「トム」彼女は言った。「あなたは天使だわ。マーティンのことが死ぬほど心配なのよ。どうか元気づけてあげて——」彼女は言葉を切り、悲しげに頭を横に振った。「こんなこと言うべきじゃなかったわね。あなたは、いつだって元気づけてくれてるわ。あなたがこの前来てから、ここ数日、彼の様子が変わってしまったて」

「そうか、知らなかったよ」トムは、ためらいながら言った。「でも、確かに彼は今月になってから、少し気落ちしていたようだね?」

「トム、あの人の置かれている状況は以前よりずっと悪いのよ」ブレンダは深刻な面持ちで言った。「仕事を探し歩いてきた悲惨な時間が、彼の心をスタスタにってしまったの。いつも座って、くよくよ考えてばかり。今じゃ、カムデン・ヒースまで散歩に行くこともなくて、すっかり気落ちしてしまってるわ」

「そんなにひどいのかい?」彼は頷き、それから明るい顔で言った。「どうしたら元気になるか、知ってるよ。今日の午後連れだして、可愛らしい子犬でも買ったらいいかも——コッカースパニエルとかケアンテリアとか。それで散歩に行けるだろう!」

彼女は素早く首を振った。「いえ、いえ、トム。これ以上あなたにお金を出してもらおうわけにはいかないわ。私たちやヒューやロムニーに、あなたは大金をつぎ込んでいるんですもの」彼女は困惑したように彼を見つめた。「あなた、ひどく痩せたようだけど、トム。どこか問題でも?」

トムは四十歳だが、見かけは物静かな痩せた老人のようだった。第一次大戦中フランスでガス攻撃を受けなければ、まだ兵役に就いていたであろうし、腰が曲がっていても、まだまだ兵士らしさが残

つていた——六フィートの細身の体、きちんと整えた口髭、きよろきよろとよく動く澄んだ瞳。トム・バイパスは顔立ちもよく、洗練された男性だ。身なりにあまり気を配ってはいないが、おそろくこの厳しい時代、不意に転落していった親類たちに手を貸すのが、自分の義務だと思っているからである。

ブレンダの不安をよそに、彼は穏やかに微笑んだ。トムが毒ガスを浴びて肺を患っていることは、すでに誰もが知っていた。暑い八月は、悪臭と粉塵と何やらわけのわからぬものにやられて、体がかなりこたえているようだった。

「あなたの体調が悪そうで、見ている方もつらいわ」ブレンダが言った。「しばらくのあいだ、どこか他の所へ行ってみたら？ 静かな海辺の町とか。その方が体にずっといいわ、トム」

「海辺？」彼は含み笑いをした。「僕らは、来週の月曜からシーバラに行くんじゃないかな——四人全員で？」

ブレンダは困ったようにチツチツと舌を鳴らした。「それが、マーティンの神経にさわっているのよ。それを考えると耐えられないらしくて。あの意地の悪い老人のところへ行かなきゃならないなんて、ゾツとする。いくら叔父で、彼の誕生日で、みんなで行くのが約束だからって——要するに、そういうことなのよ。みんなが嫌っていること、叔父様だって知っているはず。それなのに関係をさらに悪くするだけじゃない」

「まあね——彼はかすかに笑った——」叔父がそれを知っているんだから、いいじゃないか。それに、ある程度の自尊心は押さえないかね。いつか、それぞれの手に四万ポンド入るはずだ——もし、彼の気が変わらなければ」

「彼の気が変わらなければ！」彼女は鼻を鳴らした。「まったく巧妙な手口ね。慎重にあなたたちをつなぎ止めようとするのよ。そもそも、あれは私たちのお金だわ——実際は」

トムは頭を横に振った。「それについて、くどくど言っではいけないよ、君。僕たちのお金だつて証拠は、一ペニーたりともないのだから」

「どうして彼は今、私たちを助けてくれないのかしら？ あんな態度を取る代わりに」彼女は激しく首を振った。「もし私が今、百ポンド、二百ポンドもらつても、まだまだ彼には浅ましいほどのお金があるでしょう」彼女は何かを思い出したようだった。「そういえば、ヒューのこと訊くの、忘れていたわ。彼はどうだったの？」

「そうだね」——彼は口ごもった——「君の予想通り。叔父が手紙で断つてきても、ヒューはペイリングスに行ったよ。叔父は彼に会おうともしなかった。でも、執事のサービスが出てきて伝えた。何か言いたいことがあるなら、書いてよこせと。それからまた、サービスは伝言を持つて戻ってきた。ミスター・グリーヴは、残念ながら何もしてやれることはないと申しております、と。君は今までサービスに会つたことはないね？」

その質問は、ブレンダの怒りを他へ逸らした。トムはうまく話を続けた。

「彼は、ものすごくいい人でね。まあ、ヒューの話は置いといて。彼らの仕事ぶりは、もつとも尊敬に値するね。彼とアリス——ほら、サービスの奥さんで、家政婦をやつてるアリスのことだけど」彼は不意に話を打ち切った。「でも、ここに立って一日中話をしてるわけにはいかないな。ところで、鍵は持つてる？ マーティンが外出するかもしれないからね」

彼は地下鉄に乗つてハムステッドに向かった。丘を降りてカムデン・タウンへと、臭いが鼻につく

みすばらしい通りを歩いていった。八月の日差しを受けて、その不潔さはいくらか薄れて見えた。密かに何かを企むのは、彼の本来のやり方ではないが、マーティンが危機に瀕していることに漠然とした喜びを感じていた——驚くべきことを提案するつもりだったからだ。これまでにはないほど、トムの心はヒューバート・グリーヴに対する憤怒でいっぱいだった。ブレンダが言ったことは正しい。四人の男がこれほどまでに自尊心を捨て、あんなところまで赴き、じつと辛抱の眼差しで座り、骨を待つ犬のように黙っているなんてまったく忌々しいことだ。叔父が、さげすむのは無理もないことだ——おそらく、四人が彼を忌み嫌うがごとくに。

それから、彼はマーティンのことを考えはじめた。もうじき五十になり、仕事の見込みはほとんどない。不況はまだまだ続き、世界は最新の発想を抱いた聡明な若き技術者で溢れている。そして再び彼は密かな満足感を抱いた。マーティンにとっては、彼がこれから行おうとしていることが、素晴らしい計画だとは思えないかもしれないが。

フラットは青果店の上にあつた。午後一時四十五分。横のドアから中に入るとき、店は昼休みのため閉まつていた。階段を上がっていくと、建物は空っぽのように静まり返り、自分だけしかないように感じられた。日差しが屋根の小窓から差し込み、がらんとした踊り場の暗さが一層強調されている。そのときだった、ドアが施錠され、かんぬきが掛かり、一枚の紙切れがドアノッカーの下に留められているのに気が付いたのは。

ここには入らぬように。警察を呼んでください。

彼は一瞬、息を呑んで立ちすくんだ。それから体を後ろに傾け、ドアに体当たりしていった。蝶つがいは脆く壊れ落ち、もう一つを踵で激しく蹴って、力ずくで引き剥がした。ドアをもぎ取り、中へ突っ込んでいった。

マーティン・グリーブは台所において、頭をガスオーヴンの中に入れていた。瞬時にトムは彼の体をそこから引き出し、窓を開け、二人とも頭を出して外の新鮮な空気を吸い込んだ。それから、マーティンの瘦せた体をなんとか肩に担ぎあげ、寝室の椅子に横たえた。肺に詰まったガスを出すため、猛然と胸を圧迫し続けた。そのとき、ガスバーナーから、まだシューシューと漏れた音がするの気が付いた。再び寝室に戻ると、マーティンの呼吸が楽になっていくようだった。しかし今度は自分自身が気を失いそうになり、すぐに医者を探しに外へ出た。

二百ヤードも離れていないところで一人の医者を見つけた。数分後にすぐ跡を追う、と医者は告げ、トムは先に戻った。階段の登り口のところを警官が一人いて、不審げに上を見ていたが、歪んで曲がったドアは、その視界に入っていないようだった。無帽の男が通路から怯えたように出てきて、警官をじろじろ眺め、興味深い出来事は起こりそうもないと判断したのか、勝手口を大きく開けたまま去っていった。

「このあたり、ひどいガスの臭いがしませんか？」

「そうなんです」トムが言った。「実は、私のいとこが寝ているあいだに、風でガスのノズルが吹き飛んでしまったようでした。私がたまたま立ち寄って、見つけたんです」彼は、秘密を打ち明けるように微笑んだ。「医者が今、診にきてくれるところです。特に被害はないようでしたが」

ちょうどそのとき、医者が来た。警官は、役人らしく一、二度頷いて見せ、また疑い深い眼差しで

あたりを見まわし、去っていった。

「このことは口外しないでください、ドクター」踊り場までくると、トムが釘くぎを刺した。「彼の手下が終わったら、全てお話しします」

十五分ほどで、医者はまた出て行った。マーティン・グリーブは間一髪のところだった。ちょうど意識がなくなったとき、トムがドアに体当たりして、押し入ったのだった。今、彼は半分眠った状態です。ベッドに横たわり、黄色がかかった蒼白な顔とその奇妙な表情は、あの世との際きわを覗き見た男のものだった。それから、医者イサナの使いの少年が、患者に粉薬こなぐすりを持ってきた。五分後にはマーティンは寝息を立てて眠っていた。

その日の午後のうちに、トム・バイパスはドアを直した。ガスの残った臭いを部屋から追い出し、居間を明るくするため花を買ってきた。ブレンダのお茶の用意をしようと、やかんを火にかけた。月曜日は早く帰ってくるはずだ。そして、六時前にそっとマーティンを起こした。

「起きる時間だ、おい」トムは微笑んで彼を見た。「ブレンダがもうすぐ帰ってくる」

マーティンは当惑したように彼を見つめ、それから思い出し——顔をそむけた。

「後生だから、今回のことは、口外しなくてもいいんだ」トムは言った。「医者には話をつけてあるし、万事取り計らってあるから。心臓発作ということで。そんなに深刻じゃない——ただ、暑さのせいさ。いいかい？」

六時半にトムは帰ることになった。ブレンダが彼のあとについて寝室に入ってきた。

「彼と二人だけで、そっと話をさせてほしいんだ」トムは彼女に微笑んだ。「君がここについているより、その方がいいと思うよ」

マーティンは彼の方へ目を上げた。その目には恥辱と果てしない悲しみ、そして崇拜するような不思議な何かが宿っていた。低い囁きが彼の口からもれた。

「どうして、私をこの世に連れ戻したんだ、トム？」

トムは彼に向かって頭を横に振り、おかしな笑みを返した。

「そのまま静かに横になっているんだよ。そのことについては、また別のときに話そう」彼はもう一度頭を振り、不意に屈み込み、ほとんど聞こえないほど小さな声で病人の耳に囁いた。「あんな手段は、もう二度と取らないだろうね？ いいね、マーティン？ 約束してくれ！」

マーティンは一瞬、目を閉じ、また開き、他へ逸らした。

「わかったよ、トム。約束する」

彼は立ち上がり、ブレンダに聞こえるよう声をかけた。

「それじゃあ、お大事に。水曜日になったら真っ先に来るよ」

まだ何か懸念があるように、彼はドアのところまで立ち止まった。ドアをかすかに開き、ブレンダが台所の流し台でカタカタ音を立てているのに耳をそばだてた。静かにドアが閉められ、彼はベッドの方へと戻った。再び身を屈める。

「水曜の朝、来るよ、マーティン。たぶん、ちよつとした良いニュースを持って。君にちよつと頼みたいことがあるんだ」マーティンはゆつくり首を左右に振った。「いや、仕事じゃない。心の中でよく考えてほしいんだよ」彼の目が素早くドアの方へ向けられた。しばらく耳を澄ませ、また囁いた。「自分に問いかけてほしいんだ、この質問を。真剣に問いかけてほしい、でも、何も心配することはない。君は、間違つた男を殺そうとした。そう思わないか？」

それが八月二十三日、月曜日の夕方だった。火曜日の朝、シーバラのキャリー警部が警察署にいたとき、一件の連絡が入った。巡査部長が電話を切るまで彼は待った。「はい、かしこまりました。ただちに様子を見に伺います」

ヒューバート・グリーブという男が、屋敷——ペイリングス——の敷地内に前夜、侵入者があつたといい、警察の対応を依頼する電話だった。

「彼は誰なんだ？」キャリーが訊いた。

勤務にあたっていた巡査は、その人物について詳しく知っていた。

「変り者の老人です、警部。ロンドン・ロードを上がったところのあの大きな屋敷に住んでいます。ご存知だと思いますが、ここに來るとき、右手に見えますよ。屋敷の名前はペイリングス。大金持ちだつていう噂です」

「キャリーは頷いた。「どこの場所か、わかるよ」それから、少し面倒くさそうに呟いた。「ちよつと行つて、直接会つてきた方がよさそうだ」

彼は自分の車を出し、巡査部長——名前はポールゲート——を連れ、出発した。ペイリングスは町の二マイルほど北にあり、二百ヤードほど続く車道の先に位置する。西側には丘陵地帯の美しい眺めが連なり、南の果てにはイギリス海峡が臨める。かなり大きなビクトリア朝の屋敷で、庭は、どこにでも生えているような草木でうっそうとしていた——チリマツ、月桂樹の生垣、苔むしたクリケット用の芝生、ミニチュアの塔のある寺院風東屋。——最初の屋敷の所有者が設計したときの状態を保っている。

執事のジョン・サービスは、二人が到着すると、すぐにグリーンヴ氏に申し伝えた。執事は、やや老いた物静かな男性で、物腰も穏やかで、どこか自然な威厳が感じられた。背が高く、見かけは立派なもの、尊大さはまったく感じられなかった。

「感じのいいご老人だな」キャリーがボールゲートに囁いた。

「グリーンヴ老人の方は、誰に訊いても風変わりな人らしいです。足元にご用心を」

すぐにヒューバート・グリーンヴが入口の広間に出てきた。ひからびた、疑い深い目をした七十五歳の老人。リユーマチで少し膝が曲がっているため、左手に杖をつけて体を支えている。一般的に貧弱と言われるのは彼のような人間だろう——こけて青白い頬、薄く青みがかった唇、細い首にひよろつとした脛。しかし、彼の態度は抜け目なく、攻撃的ではなかつた。キャリーが詳しい情報を求めると、すぐに老人が執事にくつてかかった。

「説明しろ、あのことを！」彼は顔を向けて執事を睨みつけた。「ばかみたいな顔で、そこに突っ立つてるんじゃない」

「それが、旦那様、詳しいことを知っているのは庭師でして——」

「じゃあ、そいつをつかまえてこい、まったく。つかまえてくるんだ！」老人は怒鳴った。

五分も経たぬうち、グリーンヴ老人と庭師と二人の刑事が、東屋の階段にそろった。そこは応接間のドアから二十ヤードもなく、庭師が状況を説明するのに適した場所だった。庭師が懐中電灯の閃光を見たのは、まさしくその場所で——前夜の八時半頃——その時間に敷地内にいたのは、温室のライトを少し弱くした方が良くと考えて、様子を見にきたのだった。そこに着いたとき、誰かが走り去る足音が聞こえた。しかし、暗闇の中、追いかけても無駄だと思つた。方向も定かではなく、あつという

間に音も消えていった。何者かがいたという二つの形跡が残っていた。薔薇の花壇が踏みつけられており、どこにでもある金属製のケースに入った巻尺が落ちていた。庭師は、それを取り出した。

「正確には、どのあたりでそれを見つけたのですか？」キャリーが尋ねた。

庭師は煉瓦で囲まれた場所を示した。そこは、東屋へ続く柱廊ロウジヤウのようになっている。

「それから、男はどこへ向かっていったのですか？ あなたがわかる範囲で」

「その植え込みを抜けていきました」男は、東屋の裏側にある低木の茂みを指さした。その向こうに応接間のドアがあった。

「植え込みの後ろ側には何が？」

「芝生です」男が答えた。「芝生の両側は車道になっています」

キャリーがグリーヴ老人に顔を向けた。「その男は、道路へ出るのに一番の近道を通ったようです。それから、このケースですが」彼は庭師に訊いた。「誰か、中を開けてみましたか？」

「いいえ」庭師が言った。「最初に見つけたままの状態になっています。中身が何かわかっていません。開ける必要はないと思います」

「わかりました」キャリーは納得した。「確認のため、あなたの指紋を取らせていただきます。それから、巻尺を持ち帰り、使用したときの指紋が残っていないか確認してみましよう。何か他のものも落ちていないか、植え込みを捜査してみます」

さらに二、三、質問し、男を放免した。

「さて、私は植込みの方を探してみます」彼は老グリーヴに言った。老人は不機嫌な顔で睨みつけていた。それから、キャリーが茂みの端の方に足を入れると、老人は怒鳴り声を上げた。

「こんちくしょうめ！ どこに、そのでかい足を入れてるんだ！」

「足、ですか？」 キャリーはあどずさりした。そして、気が付いた。縁のところに、まばらなピンク色の花が見られ、そこに彼は足を置いていたのだった。「すみません、ご主人。雑草だと思ったもので」

「雑草だと！」 老人は殺意を抱いているような眼差しで彼を見た。それから、足を踏み鳴らして、一、二ヤードほど離れたところに移った、まるで愚か者と一緒にいるのを警戒するかのように。

キャリーは耳まで赤くなり、今度は慎重に植え込みに足を踏み入れた。すぐに老人は彼のうしろにまわり、目を光らせていた。何か機知に富んだ言葉で、この場を和やかにできないものかとキャリーは頭を悩ませた。

「あなたは、きつと園芸がお好きなんですね？」

「ふむ、だからなんだと言うんだ？」

「いえ、別になんでもありません」 キャリーが言った。「ただ、非常にお詳しいように思えたもので」 老人は少し気持ちがよさまったようだった。少なくとも、うなただけで何も言わなかった。

「ところで、ご主人」 キャリーは体を起こした。「ここは薔薇を育てるには、うってつけの場所だと思えますよ——この古い低木を掘り起こし、肥えた土を入れると」

老人は、恐ろしい憎しみを込めた目でキャリーを睨みつけると、背を向け、足を引きずりながら来た道を辿って家へ戻っていった。

キャリーとポールゲートは、巻尺の指紋以外何も見つけることができなかった。しかし、通常の手順を踏んで調査に取り組んだ。その夕方、署長のメージャー・テンベストがキャリー警部を呼び、苦

情がきていると告げた。ヒューバート・グリーンヴが電話で署長を出せと要求し、彼が出ると、こう言った。警察は、ペイリングスの調査の代表に愚か者をよこすのか。おまけに下品で無作法だ。グリーンヴ老人によれば、キャリーは故意に無礼な態度をとっているようだったと。

キャリーは憤慨し、弁明の言葉も出ないほどだった。ポールゲートも同様に腹を立て、確信的な証拠をあげ、反論した。

「わかった」テンペストは納得して、彼らに言った。「でも、そういった疑いを持たれた場合は、二人とも口を閉ざしておくのが一番だ。この件については心配する必要はない。うまく言いつくろつておこう」

キャリーは自分の部屋に向かい、そこでポールゲートに思いを吐き出した。

「まったく、なんて忌々しい年寄りだ！」とにかく、吐き出すべき言葉は際限なくあった。ポールゲートも謹んで、自分の割り当て分を吐露した。それから、キャリーは残忍とも思える笑いを浮かべた。「巻尺からとった、あの指紋はどうした？」

「ここにありません」 巡査部長は言った。

「どこかにやってしまえ」ぶっきらぼうにキャリーが言った。「それから、巻尺も金庫に入れてしまえ。あの忌々しい嘘つきの老いぼれが、自分で調べればいいことだ」恐ろしい脅しの言葉とともに、彼の最後の怒鳴り声が響き渡った。「もし、私と君が、こういう立場じゃなければ、暗くなつてからあそこへ行って、枯れた薔薇を全部掘り起こしてやるのにな」